

# 未来への伝承

今回の未来への伝承は、おおつ野地内で発掘調査された江戸時代前半の屋敷跡を紹介します。この屋敷跡は、出土遺物から17世紀後半から18世紀前半頃のものと考えられ、現在のおおつ野ヒルズ一帯の区画整理事業に伴って、平成4年に発掘調査が行われた尻替遺跡で見つかりました。

この調査では、江戸時代の屋敷跡と共に、縄文時代と古墳時代の鍛冶工房跡、平安時代の火葬墓なども見つかりています。この他にもおおつ野地区一帯で行われた発掘調査では、様々な時代の遺跡が多数発見されており、昔から人間が住みやすく、土地利用しやすい地域であったようです。

江戸時代の屋敷跡からは、柱の間隔が南北で1間、東西で3間の掘立柱建物が1棟見つかりました。建物の規模は小規模で、内部には西側に炉の跡があり、日常の煮炊きに用いていたようです。建物の西側には、1条の柵列で南北に仕切られていました。

柵の外側には平面形が羽子板のような竪穴遺構が2基、東西と南北に鍵の手のように配されています。出入口から中央にかけて床が固くなり、深さは50センチメートルから1メートル程

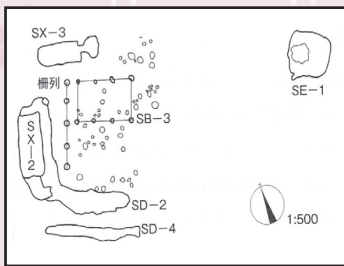
## 江戸時代の農村屋敷跡

### — おおつ野

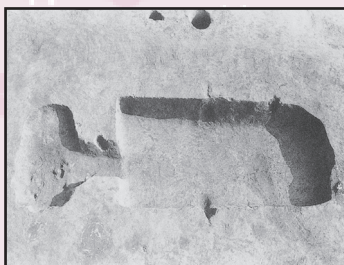
### 尻替遺跡

で、周囲に不規則な配置で柱穴があったので、何らかの屋根をかけていたことが分かります。このような竪穴遺構は近世都市江戸と関東地方の近世遺跡で多く発見されており、「地下室」と呼んでいます。江戸では、麴などを製造するために、地下室を造っていたことが分かっています。麴は、密閉空間での培養が好まれ、清酒・味噌・醤油・ミリン・甘酒・焼酎・米酢などを製造する際、原料を発酵・熟成させるために用いられます。尻替遺跡の竪穴遺構はどのような役目を果たしていたかは不明です。主室の中央が特に固く締まっていることから、何らかの作業を行っていたことが推定され、平面形は江戸周辺で見つかる地下室と大変良く似ています。

建物の南側には2条、北側には1条



▲尻替遺跡近世屋敷模式図  
SBは建物跡、SXは竪穴遺構、SEは井戸を表します。



▲尻替遺跡近世竪穴遺構  
左側の小さな穴が入口です。作業場として使われた可能性があります。

排水用と思しき溝が掘られ、その他用途不明の穴も多数見つかりました。建物からやや離れて井戸も1基設けられていました。発見された井戸の跡は、浅い皿状の掘り込みに直径約1.5メートルの不整形の穴が深さ4メートル以上掘られていました。井戸を廃絶する時には、土砂を投げ込んで埋め立て、穴の上の方は粘土で塞いでいたことが分かりました。

屋敷の出土遺物には、かわらけ・ほうろく・火鉢・網の錘、瀬戸美濃窯(愛知県北西部から岐阜県南部)で造られた陶器の皿・椀・天目茶碗、砥石などがあります。金属製品には煙管や鉄の破片などがみられます。天目茶碗は喫茶具ではなく、お湯などを飲むのに用いたようです。出土遺物は日用品が多く、当時の一般的な農民層の屋敷で



▲尻替遺跡出土遺物  
香炉状の小型鉢、瀬戸美濃産天目茶碗のほか、かわらけなどが出土しました。手前右側(4点)は魚を取る網の錘です。

あったと思われる。この屋敷が機能しなくなった江戸時代後半からは、新田開発や集落の移動、現代に通じる家制度が成立するなど大きく社会が変化します。江戸時代の屋敷跡の発掘調査例は少ないため、今後の研究によって江戸時代の農村の在り方を復元する一助として尻替遺跡の調査成果は期待されます。

尻替遺跡の出土遺物などは、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で9月2日まで開催中のテーマ展「変わるマドリ」で展示されています。この記事以外にも様々な貴重な発見例や出土資料を展示していますので、ぜひ足をお運びください。

関上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(0826・7111)